# レーニン国家論の誤謬

東京帝国大学図書館
特別
又6
9291
2

早稲田大學圖書館

# レーニン国家論の誘謬

佐野学

レーニンは一九一七年の革命のさなかで「国家と革命」を著作した。権力をとるかとらぬかの瀬戸ぎわに、むしろ何かしら何でも権力をとらずにおかぬといふ異常な意志緊張のなかに書かれたからである。レーニンは~~異常な~~すばらしい迫力をこもつていた言葉を弄したり美

Z6
9291
2

八水田印行

〈97-212〉

文で空ッ風の頭脳をごまかしたりするようなデマゴーグでなく、科学的な叡智の人であったから、「国家と革命」は小冊子であるけれども、マルクス主義国家論の一つの古典的著作となっている。

絶戦争にこの書物も新たに邦訳せられて日本の英蘭主義者の間にひろく讀まれているらしい。かれらに十分理解されているかどうか疑問かあるが、分っても分らなくてもかれらがこれを公式的に信奉するであろうことはまづ明かだ。



しかしレーニンの「国家と革命」はマルクス主義国家論にとつて古典となつていても、これをプラトンの国家篇とかアリストテレスの政治学とかと同じく古典の国家論一般のなかで古典的地位を占むるに至つたものとはいひ難い。この書物はマルクス主義一般のもつ誤謬をその根底にもつていち。

この書物の基本内容は二つある。第一にその大半はマルクス、エンゲルスの国家論の忠実な祖述である。第二にその大半に当時レーニンが最大の精力をもつて建設しようとした

プロレタリア独裁及びソヴエト権力の合理づけがある。(したがつて)私の批判もこの両面にわたらねばならない。

## 二、国家と階級

レーニンはまづ冒頭にマルクス、エンゲルスの国家論の精髄を「国家は階級抑圧の機構なり」といふテーゼに要約する。国家は階級対立の不宥和性の産物、表現なるもので、一の



階級の他の階級にたいする壓迫の機関で、監獄、裁判所、警察、軍隊などがその道具立てだといふのである。古代国家、封建国家が奴隷、農奴の搾取機関であつたばかりでなく、近代の代議制国家は資本による賃労働の搾取機関だとなす。

以上を批評しよう。

これは例の如く一切の歴史や社会的現実を階級といふ唯一の範疇で割り切らうとする階級至上主義である。階級がそのように科学

の分母のような作用をしてくれるならば、それほど簡単なことはない。しかし階級という範疇にそれほどの絶対力はない。早い話しが現在の日本国家の浅ましい姿は民族全体の若干の集中したもので、階級関係からだけの説明や、階級闘争といふ切開手術だけで解決できるものでない。現実はずつと複雑だ。国家の成立には階級ばかりでなく、民族も精神文化も要因としてはたらいてをり、国家の性格は階級的利益的な階級的契機ばかりでなく、



人間を愛をいつてもすべつけて共同社会的性格をもつている。もし国家が階級支配の機構だけにとどまるならば、国家はつねに不和、擾乱、争闘、不倫快の連続であつたであらうが、事実上は文化の名に値して人間の精神的物質的生産物は、国家の成立した後に、国家の枠内で成長した。戦争は国家の歴史にほとんどつきものであつたが、世界の人類の平和的結びつきは国家の媒介をもつて大に促進された。人類的なものは国家的なもの

なしには共体とならない。世界市民の概念は、現実条件たる国家を超越してかちえられるものでなく、国家の共同社会的性格を基礎として発展する。マルクスを載国の階級国家論から以上のことは説明できない。

国家権力は階級抑圧だけのものとしてマルクスを載者によって憎悪されている。権力にはたしかに階級性があり、抑圧、征服、暴行などの面がある。しかし権力の機能はそれだけに終るのでない。権力には同時に全社会



生活を組織立て、秩序をなへ、規律化し訓練する面がある。発生的にみれば権力はかくて社会的必要に應じて成立したものであり、この機能は発生当時だけに消滅したものでなく、権力に階級性が加はったといへども制度として残っている。マルクスを載は歴史的に形成された、権力の抑圧的機能の面のみしか見ていない。かゝる見解の奥には被圧迫階級の利己的主張や怨恨憎悪の心理がある。マルクス主義は社会を圧迫階級と被圧迫階級の二

つに分けて思考し、好者の利益のみを主張し、社会全般についての統一的思考が缺けている。利益の多いか少いかを争ふ唯物的利益主義かその思考基準である。かゝるものから真の世界とか人類とかいふ観念は成長できない。換言すれば マルクス主義が利益的な階級を義に立つかぎり、かれらには真の人類愛が缺けていゝのである。

マルクスを義国家論は国家において階級のみをみて民族をみることができない。しかるに国家から民族を中心として形成されるものであることは、十六世紀以来のヨーロッパ諸国家が例外なく民族国家として発達してきた厳然たる事実が證明する。労働階級は民族の外なる存在でなく、むしろ民族の中心を形成する大衆である。民族を最も愛するもの、民族の伝統を最も豊富に自己内部に蔵するもの、民族の進歩の原動力たるもの、それは勤労者の大衆にほかならない。

こゝで私は重要なテーゼを提出する。

二 小

は、民族が共同社会的性格を有するかぎり、
国家もまた共同社会的性格を有すること、国家
の民族的契機がその階級的契機の最高性とつ
ねに緩和したこと、これ利益や理知
からでなく没我的な相互愛を以て人間が相結
社会関係をむすぶことが共同社会の根本特徴
である。民族は最も代表的な共同社会の類型
である。而家の共同社会的性格は民族が共同
社会であることから生ずるのである。階級分
裂が私有財産と共に人類の歴史のなかに形成



されたる一種の必然態であったことは疑ひない
。勤労し生産する階級が進歩的であり、然ら
ざる階級は退歩的であり、前者のごとき者にい
する階級闘争は民族の進歩のために肯定せら
れる。たゞその闘争は常に利益的
動機からでなく民族的基盤に立つ場合におい
てのみ合理性を有する。それは今日の日本の
ように国全体が破滅の危機にあるかごとき際
に特に顕著に感ぜられる。民族全体が立ち直
ることなしに、労働階級だけがアメリカ労働

者のような言い方治水準に達することにあり
えない。

日本共産党はこのごろ民族といふ言葉を濫
発し時として反米的口吻を弄している。民族
といふ言葉を口にすればたちに裏切者と罵
倒したこれまでと比較すれば大変な豹変ぶり
である。しかし階級主義を固守しプロレタリ
ア独裁を基本綱領とする党が民族といふ言葉
をふりまはすのは自己矛盾であり、これは民
族を愛していて日本の民衆の感情を利用し、



それを尊重するように見せかけつつ、実はそ
れを通して民衆をかれらのいはゆるプロレタ
リア革命につれ込むためである。かれらは対
外的民族感情を煽動しようとするが、それ
は二強国対立の世界史の現実を日本において
反映ししくはそれを日本にもち込む非自主
的なもので、あゝ強国の勢力や意志を代表し
て他の強国に反対するもので、換言すればか
れらはかれらの宗主国のために日本の民衆を犠牲にし
ようとするものである。かような浅はかな偽

満に安々と乗るほど日本の民衆は愚鈍ではない。今日どの国の共産党も、マルクス主義の公式理論などよりも、二強国対立の国際情勢によって党の性格や政策を決められてしまっている。かれらの国際主義とは現実には従ソ主義をいみする。我々はいかに衰へていると雖へ日本民族の自力を基礎とする社会主義の党を要求する。これ我々がとうていは日本共産党と相いれない所以である。



三、国家と資本主義

レーニンは、今日いづれの国の社会も資本主義といふ共通地盤に立つに至つたのだから、今日なほ対抗状態にある諸国家は実は擬制にすぎなくなつたのだといふマルクスの議論を踏襲している。地盤が共通になつたれば上、その上部建築たる国家には独自性がなくなつたといふのである。

（ここから労働者の世界的横断的結合が現実的基礎を得たとしインターナショナリズムに到達する。）

一見早分りのする論理は抽象である。しかし現実はさように簡単に

割り切れない。マルクスの論理は簡単で要約的切から力強いが、それだけに危険性があるのである。現実そのものの構造や歩み方はもっと複雑

なるほど文明諸国の社会の共通的地盤は資本主義であるといへる。しかしこの共通地盤だけでただちに諸国の社会が共通化されたといふを云ない。貨幣労働とか私有財産とか利潤生産とか余剰價値とか恐慌とかはたしかに共通している。しかし諸国の資本主義それ自身にすら多くの独自的な個別性があり。自由主義の勝った英国の資本主義、独占的特徴の濃厚な米国のそれ、個人主義の強い佛国のそれ、封建的残存勢力に強く彩られていた過去の日独のそれのごとくである。これらの個別性は単に経済関係によって決定せられるのでなく、その背後の社会的歴史的な特殊性によって決定されるのである。この特殊性の説明にはこれ民族といふ要因がとり出されねばならない。

各国の経済の共通地盤はたしかに資本主義である。しかし各国の経済は（したがって各国の資本主義は）「国民経済」の形態をとっている。純粋に孤立した国民経済などはもとより存在しないから、十九世紀末以来大に具体性を増したところの「世界経済」といへども、国民経済の媒介なしには成立しえなかったし、又なほ続しえないであらう。国民経済そのものは経済であると共に政治的なものであり、社会的伝統（から制約をうけ）（州はたらい）てをり、けっきょくそこには



早稲田大学図書館

早稲田大學圖書館

八水田印行